

飛鳥寺旧境内の調査

―第197-6次

1 はじめに

本調査は、明日香村大字飛鳥での水路建設工事にともなう事前調査である。調査地は飛鳥寺の北面回廊東端から東へ約100mの水田に位置しており、調査地の北方約180mの地では飛鳥寺の寺域を区画する塀の東北隅部が検出されている（飛鳥寺東北隅の調査『藤原概報 13』）。調査区の東部は飛鳥寺寺域の東辺区画施設の延長線上にあたり、それに関連する遺構の検出が予想された。

調査区は東西約40m、南北約2mで、調査面積は約87㎡である（図132）。調査は2019年1月9日に開始し、3月1日に終了した。

2 基本層序

調査区の基本層序は、上から順に耕作土（厚さ30～40cm）、床土（厚さ30～60cm）、淡黄色粘質土（包含層、厚さ10～40cm）、灰色粘質土（整地土層、厚さ15～35cm）、緑灰色シルト（自然堆積層、厚さ15～35cm）の5層からなる。遺構検出は、まず7世紀の土器がまとまって出土した灰色粘質土層の上面で試み、続いて緑灰色シルト層上面で下層遺構の検出をおこなった。

3 検出遺構

灰色粘質土層上面では、調査区の中央部で石組溝1条（SD2045）、東部で石列を3条（SX2047～SX2049）検出した。緑灰色シルト層上面で検出した遺構は、調査区の中央部で柱穴1基（SP2046）と落込み（SX2052）、西部では自然流路1条（NR2051）、東部では柱根が遺存する柱穴1基（SP2050）である（図133）。

南北石組溝SD2045 調査区中央部にて検出した溝で、東肩には南北方向の石列をとまなう。石列は4石分検出し、調査区外の南北へ続くとみられる。石列は西に面を揃えているため溝の東肩と考えられるが、西肩については既に破壊されていたため、検出できなかった。石列は据付穴がなく、灰色粘質土層の整地にとまなうと推定される。石列の西側に接するようにして瓦堆積が集中しており、この瓦の除去後、後述する柱穴

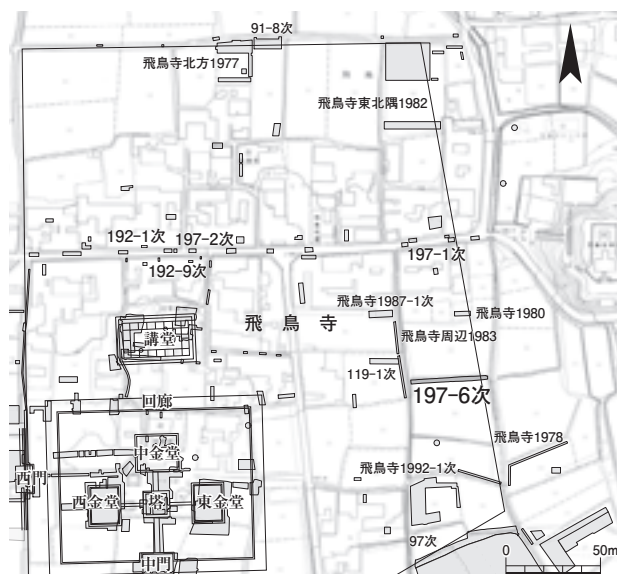


図132 第197-6次調査区位置図 1 : 4000

SP2046を検出した。

南北石列SX2047 調査区東部で検出した南北方向の石列で、西に面を揃える。3石分検出し、調査区外の北に続くとみられるが、南は既に破壊され、残存していなかった。この石列の西側では平面および土層断面でも石列を検出できず、かつ溝と判断できる落込みも検出できなかった。

東西石列SX2048 調査区東部で検出した東西方向の石列。上面を揃えるものと、北に面を揃えるものがある。後者の石列にとまなう据付穴を検出した。この据付穴はSX2048の北側で検出した東西石列SX2049の据付穴によって破壊されている。

東西石列SX2049 調査区東部で検出した東西方向の石列。東西石組溝の南肩とみられるが、北肩については調査区外のため検出できなかった。溝の幅は30cm以上とみられる。据付穴は先述したSX2048の据付穴と重複関係にあり、こちらのほうが新しい。

柱穴SP2046 調査区中央で検出した1辺1m前後の柱穴。SD2045の下層で検出しているため、灰色粘質土層による整地以前の柱穴と考えられる。柱穴の東側2m付近では木製品や削屑を含む木簡が出土した木屑層SX2052を検出している。

柱穴SP2050 調査区東部で検出した1辺60cm前後の柱穴。緑灰色シルト層を掘り込んでおり、少なくとも7世紀後半以前と考えられる。直径16cmの柱根が残存していた。

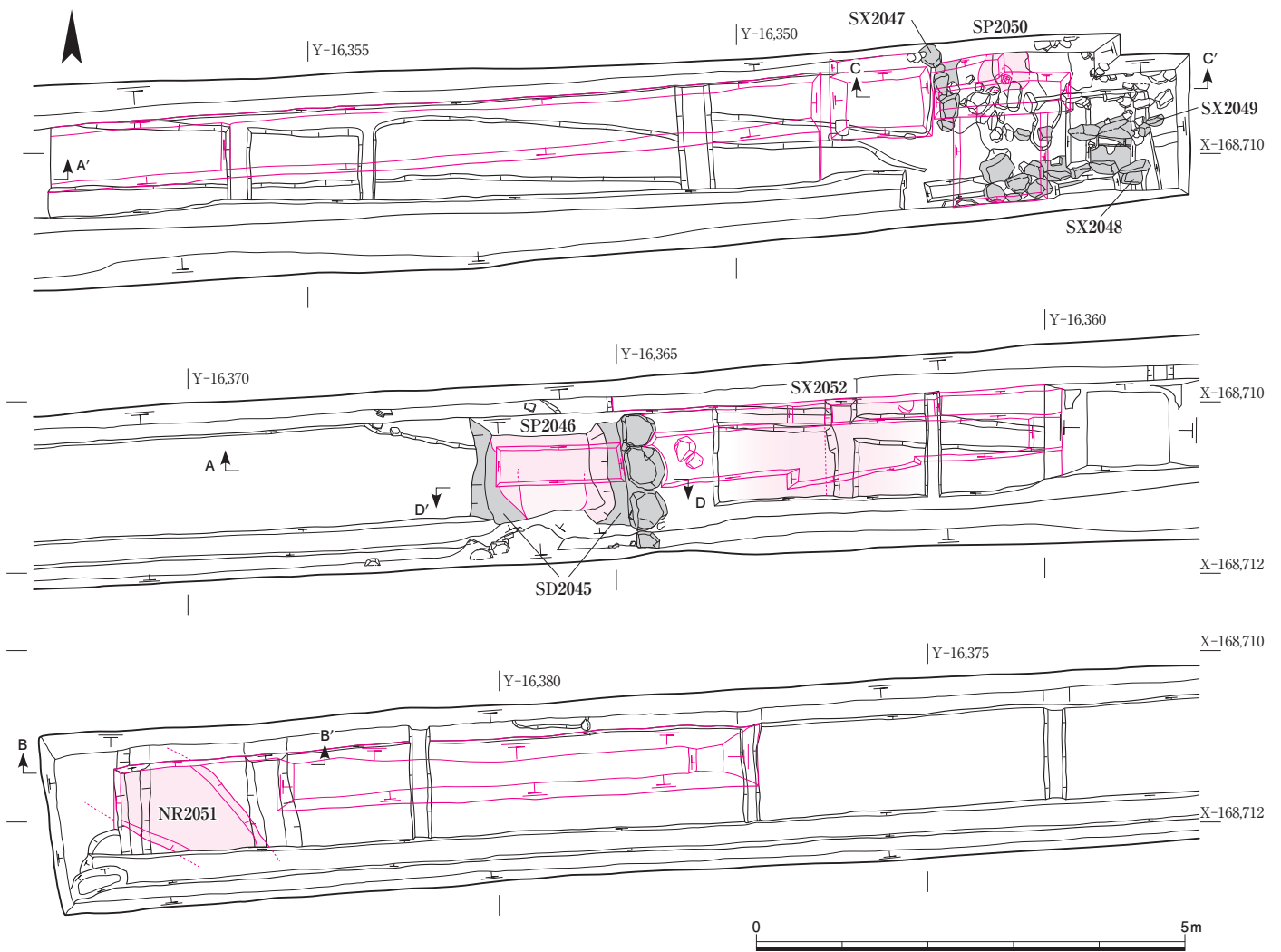


図133 第197-6次調査区遺構図 1 : 80

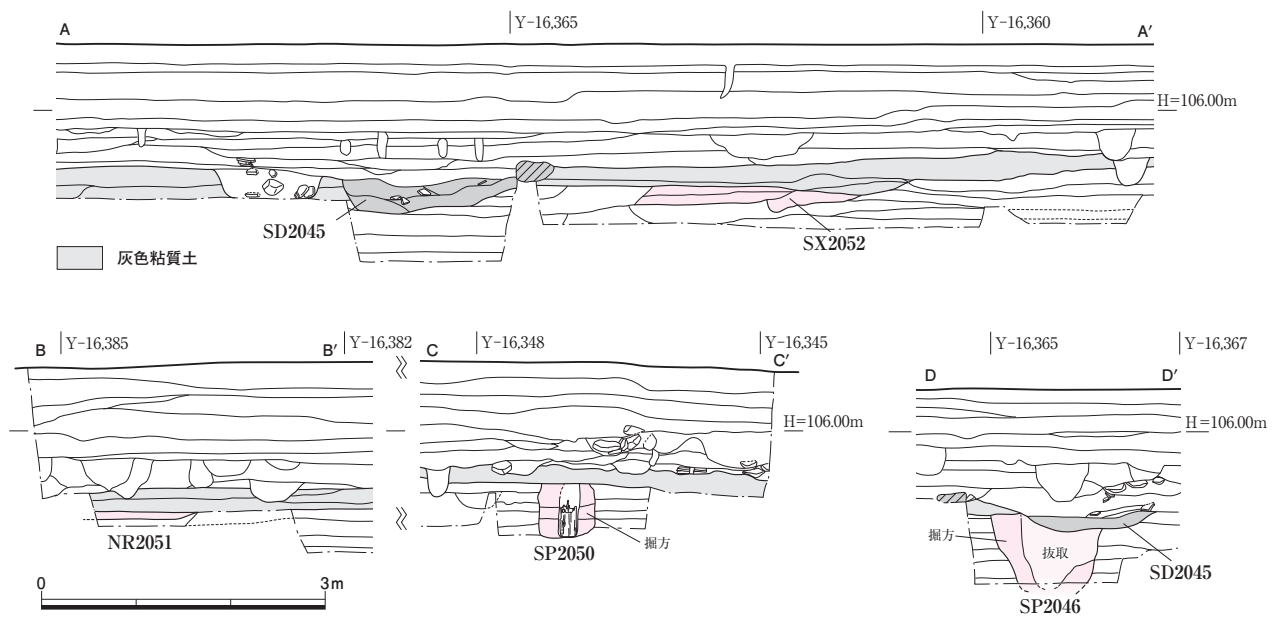


図134 第197-6次調査区土層図 1 : 80

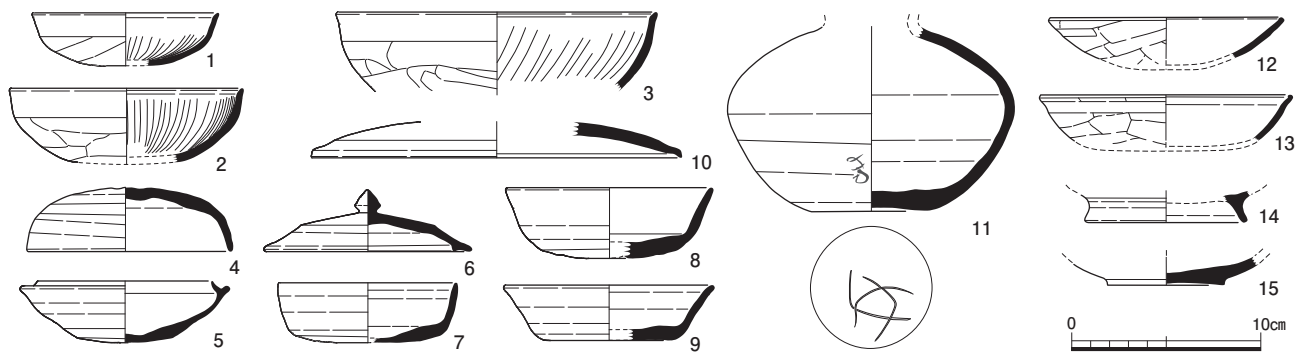


図135 第197-6次調査出土土器 1 : 4

自然流路NR2051 調査区西部で検出した自然流路。灰色粘質土層に覆われ、緑灰色シルト層上面で検出した。

木屑層SX2052 SD2045の東側の石列から東約2 m付近で検出した木屑層。最下層が浅い落込み状になっており、削屑をはじめとした木簡や木製品を多く含む。灰色粘質土と一連の整地土である可能性がある。

(土橋明梨紗)

4 出土遺物

土器 古代の土師器・須恵器を中心に、縄文時代の土器や近代の陶磁器等が整理用木箱で13箱分出土した(図135)。

灰色粘質土層からは、7世紀の土師器・須恵器を主体とする土器群が出土した。土師器には、杯Cをはじめ、杯A、杯H等が認められる。杯Cは、小型浅手のもの(1)とやや大型深手のもの(2・3)からなる。須恵器には杯Hとその蓋(4・5)、杯Gとその蓋(6・7)があり、ほかに杯A(8・9)、かえりのない杯B蓋(10)、杯B高台が含まれる。

また、調査区中央で検出したSD2045からは須恵器の壺(11)が出土した。外面の体部に「□(当あるいは多カ)」と墨書し、底部には「女」と焼成前に線刻する。内面および破断面に漆が付着しており、漆容器として用いられた壺であろう。このほかにも調査区からは、内面に漆が付着した杯や壺が少なからず出土している。

淡黄色粘質土層からは、土師器の碗A(12・13)、黒色土器Bの杯B(14)、山城産緑釉陶器の碗(15)、須恵器の水瓶または浄瓶、円面硯、須恵器の甕の体部や杯蓋を転用した硯、二重半円点の印花文をもつ新羅土器(図136)が出土した。12・13の土師器の碗Aや15の緑釉陶器の碗は9世紀前半から半ば頃の所産と考えられるが、14の黒色土器Bの杯Bは10世紀後半のものとみられる。

(山藤正敏・土橋)

瓦磚類 本調査区から出土した瓦磚類は表15のとおり。軒丸瓦では、弁端桜花形で素弁十弁蓮華文のⅠ型式のうち、Ⅰa(1)がもっとも多く、中房等を彫り直



図136 第197-6次調査出土新羅土器

すⅠb(2)、当初の外縁に被る範の外縁外側部分を除去し、外縁幅を広げたⅠc(3)は少ない。Ⅰaのうちの1点は、瓦当上半部の外縁外側に最大幅1.0cm程度の無文部分があり、その高さは内区の文様がもっとも高い(範にもっとも深く文様を彫り込んだ)部分に近い(図137写真)。無文部分は図示した位置で右上側が幅広く、瓦当部は左右に長い楕円形状を呈し直径(長径)は最大で18.7cm程度。Ⅰ型式の瓦当の直径は、Ⅰa・Ⅰb段階で通常16.0~17.5cm前後であり、本例の瓦当の直径はⅠa・Ⅰbよりひと回り大きいⅠcの中でもかなり大きいものに匹敵する。こうした外縁外側への無文部分の付加は、直径が大きい丸瓦部をⅠaの範に合わせて接合するための工夫と考えられる。本例は丸瓦部を欠損するが、剥離痕跡から復元される丸瓦広端部の外径は18.5cm程度で、通常のⅠa・Ⅰbの丸瓦先端部の外径(16.0~17.0cm程度)より大きく、Ⅰcの中にはこれに近いものがある。直径が大きい丸瓦部をもつ軒丸瓦の需要自体は飛鳥寺造営の早い段階からあり、Ⅰa段階では本例のように範に手を加えず、外縁外側に無文部分を付加して対応したが、Ⅰc段階には、範の外縁外側部分を切り落として外縁幅を調整できる形状に改変した可能性が考えられよう。なお、本例の外縁やその外側の無文部分にはナデ調整が加えられ、範本来の形状をとどめない可能性が高い。3はSD2045出土。

弁端点珠の素弁十一弁蓮華文のⅢ型式のうち、彫り直

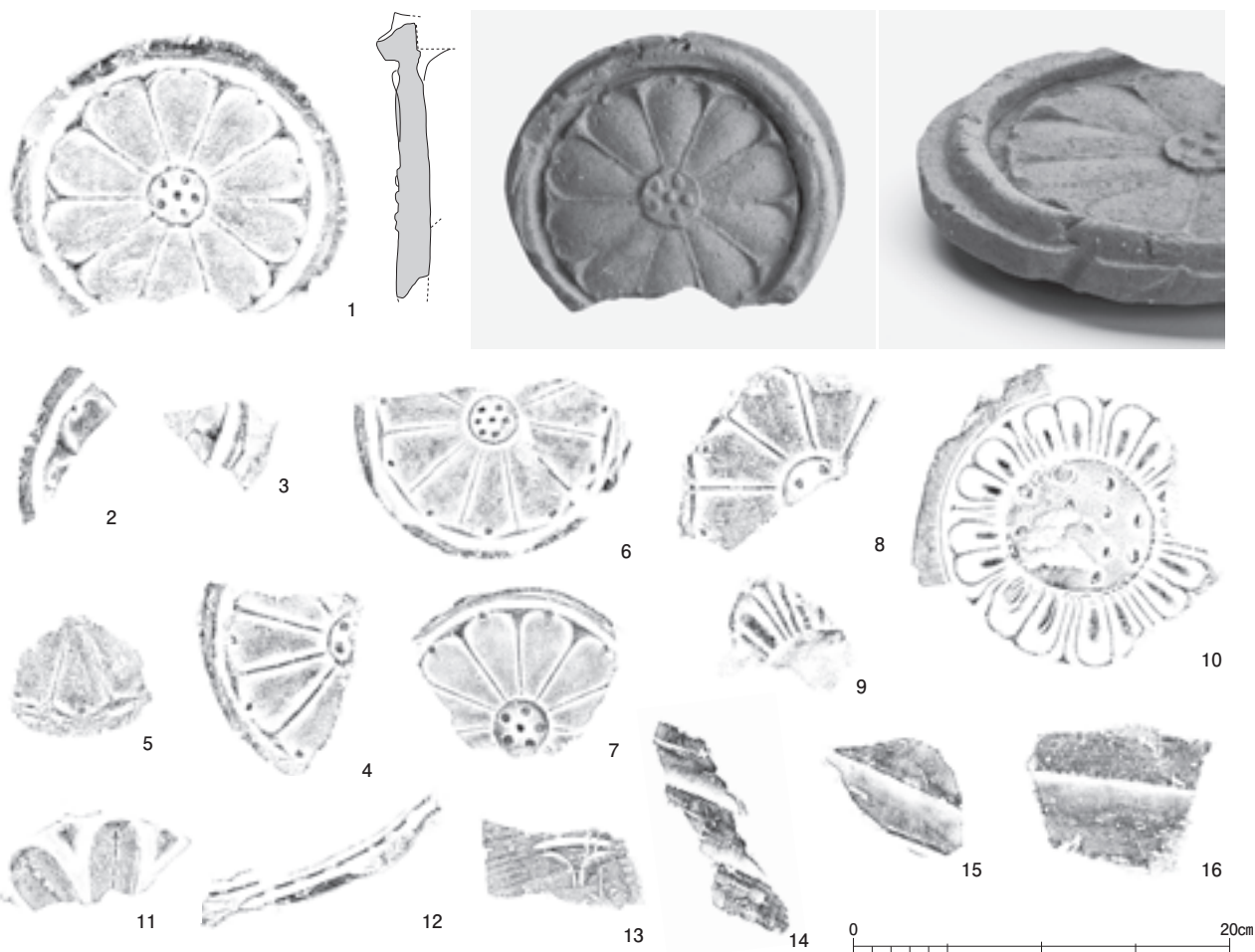


図137 第197-6次調査出土瓦磚類 1 : 4

表15 第197-6次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
飛鳥寺	I a	7	飛鳥寺	II	1	鴟尾	5
	I b	1				ヘラ描き平瓦	10
	I c	1				面戸瓦	1
	I	28				隅切平瓦	1
	III b	3				不明道具瓦	1
	III	4				瓦製円盤	21
	IV	4				磚	3
	V	1				土管	1
	VI	2				不明瓦製品	1
	VIII a	1					
	X II	1					
	XIV b	6					
高句麗系		1	不明 (古代)				
		15					
計		79			1		
丸瓦			平瓦			棟原石	
重量			291.5kg			1,051.7kg	
重量			291.5kg			9.7kg	
点数			2,962			14,384	
点数			2,962			30	

しの有無まで判明するものは、いずれも間弁を彫り直して基部が中房に届くⅢbである(4)。Ⅳ型式(5)、Ⅴ型式(6)は文様構成がⅢ型式と共通するがやや小型のもの、Ⅵ型式(7)は弁端桜花形の素弁十一弁蓮華文、Ⅷ

型式は弁端点珠の素弁九弁蓮華文で、中房蓮子を彫り加える前のⅧaのみ出土(8)。ⅩⅡ型式、ⅩⅣ型式は7世紀後半の複弁八弁蓮華文。ⅩⅡ型式は川原寺601型式と同範であるが、小片のため種は不明(9)である。このほか、川原寺から多く出土する凸面布目平瓦が7点出土した。ⅩⅣ型式のうち彫り直しの有無まで判明するものは、いずれも蓮弁を一回り大きく彫り直したⅩⅣbである(10)。11は小片であるが、素弁で弁が高く、弁中央には稜線をもち、弁間にやや水滴形に近くさび形文を配する。高句麗系的一种と考えられるが、類例を見いだせない。焼成がきわめて良好、硬質で外面が灰白色、内面が赤灰色を呈し、砂粒をほとんど含まず、飛鳥寺の他の型式と特徴が異なる。5・6は灰色粘質土出土。

軒平瓦は1点のみ、四重弧文のⅡ型式が出土した(12)。弧線は非常に細く高く、瓦当厚が2.8cm程度と薄い。13は丸瓦凸面に叩きを施した後、単弁蓮華文の型を押したものと考えられるが、小片で施文も浅く詳細は不明。鴟尾は5点出土したが、良好な3点を図示した。14・15は道上祥武によるA2類、16は大脇潔による飛鳥寺D、道上によるB2類でいずれも胴部である¹⁾。14・15は飛鳥池東方遺跡、16は飛鳥寺旧境内東南部等で出土している。12・13・15はSD2045、16は灰色粘質土出土。

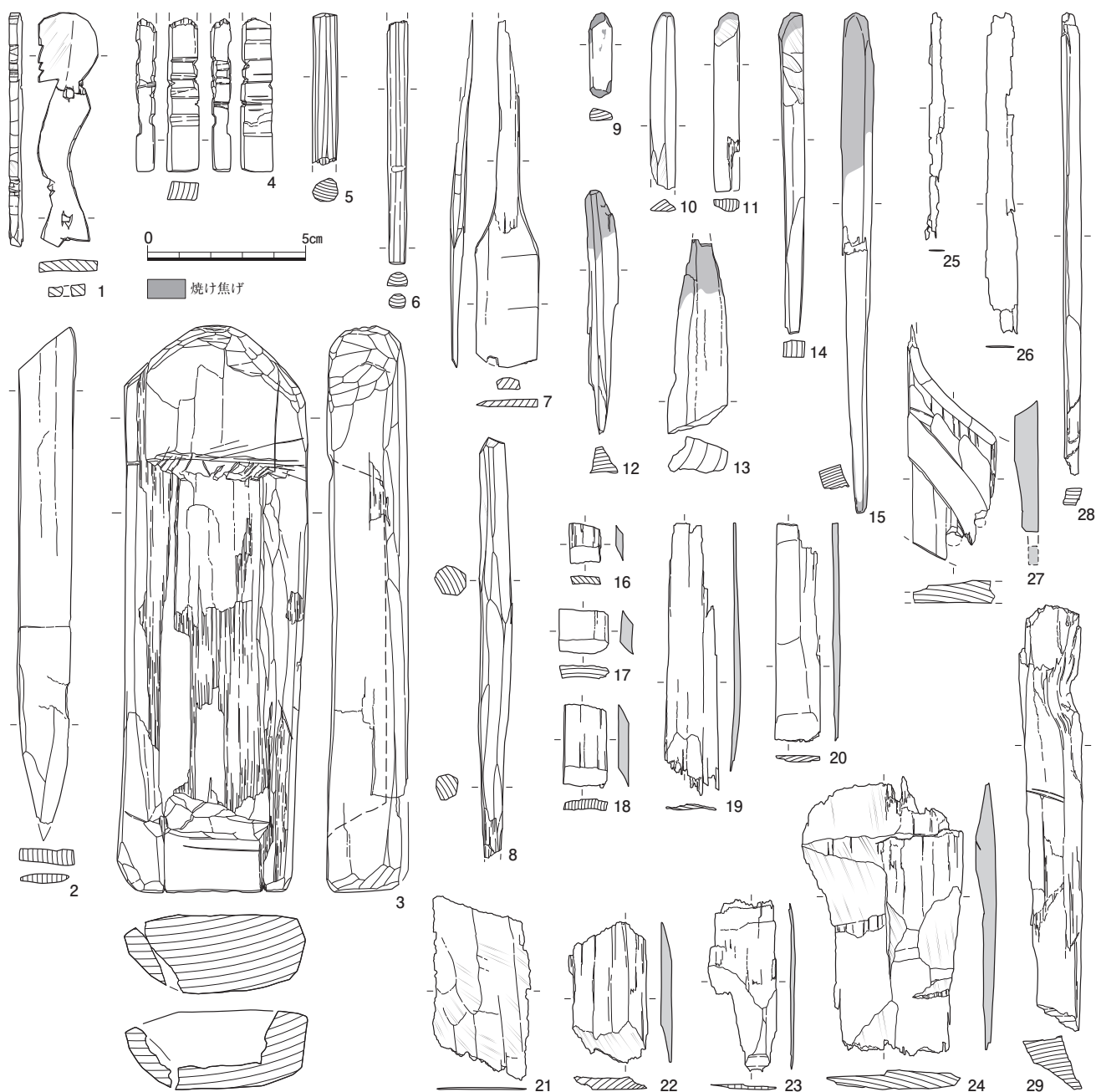


図138 第197-6次調査出土木製品 1 : 2

このほか、高熱により大きく焼け歪んだとみられる丸瓦が9点出土している。凸面は縦縄叩き後丁寧な横ナデを施し、胎土に直径3mm以下の白色砂粒を多量に含み、暗灰色から暗青灰色を呈する。凹面に粗い布目を残す行基式のものと、布目が細かく玉縁が付くものがある。

全体として、軒丸瓦に対し軒平瓦の出土が圧倒的に少ないこと、創建期の飛鳥寺Ⅰ～Ⅷ型式が非常に多く、7世紀後半のⅩⅣ型式も多いこと、創建期の中ではⅠ型式がもっとも多く、Ⅲ型式も一定量出土していること等は、飛鳥寺中心伽藍（飛鳥寺第1～3次、『飛鳥寺報告』1958）の瓦出土傾向と共通する。また、鴟尾は本調査区南方の飛鳥池東方遺跡や飛鳥寺旧境内東南部との共通性をうかがわせる。

（清野孝之）

木製品 木屑層SX2052から木製品8点、コンテナ12

箱分の切削片や燃えさが出土した（図138）。

1は組合せ式の人形（ヒノキ）。目鼻口の表現をもつ。手足は欠損。最古の部類のひとつ。2は斎串（ヒノキ）、3は船形（ヒノキ）。4はいわゆる算木（スギ）。細い角柱状をなし、長辺四面に1～4本の線刻をもつ。周辺では飛鳥池遺跡や藤原京左京七条一坊に類例がある。5・6は箸か（5はヒノキ、6はウツギ属）。7は匙（ヒノキ）。8は留め針か（ヒノキ）。9～15は先端が焼け焦げた、いわゆる燃えさし。9・15は両端が焦げる。16～29は切削片。16～18は鑿、19～24は横斧あるいは縦斧によるものだろう。25・26はとても薄く、刀子か鉈によるものか。21も薄いが工具の刃幅が広い。

繊維製品 木屑層SX2052から織物の断片（裂）20点余が出土した²⁾。断片はいずれも小さく、大きいものでも

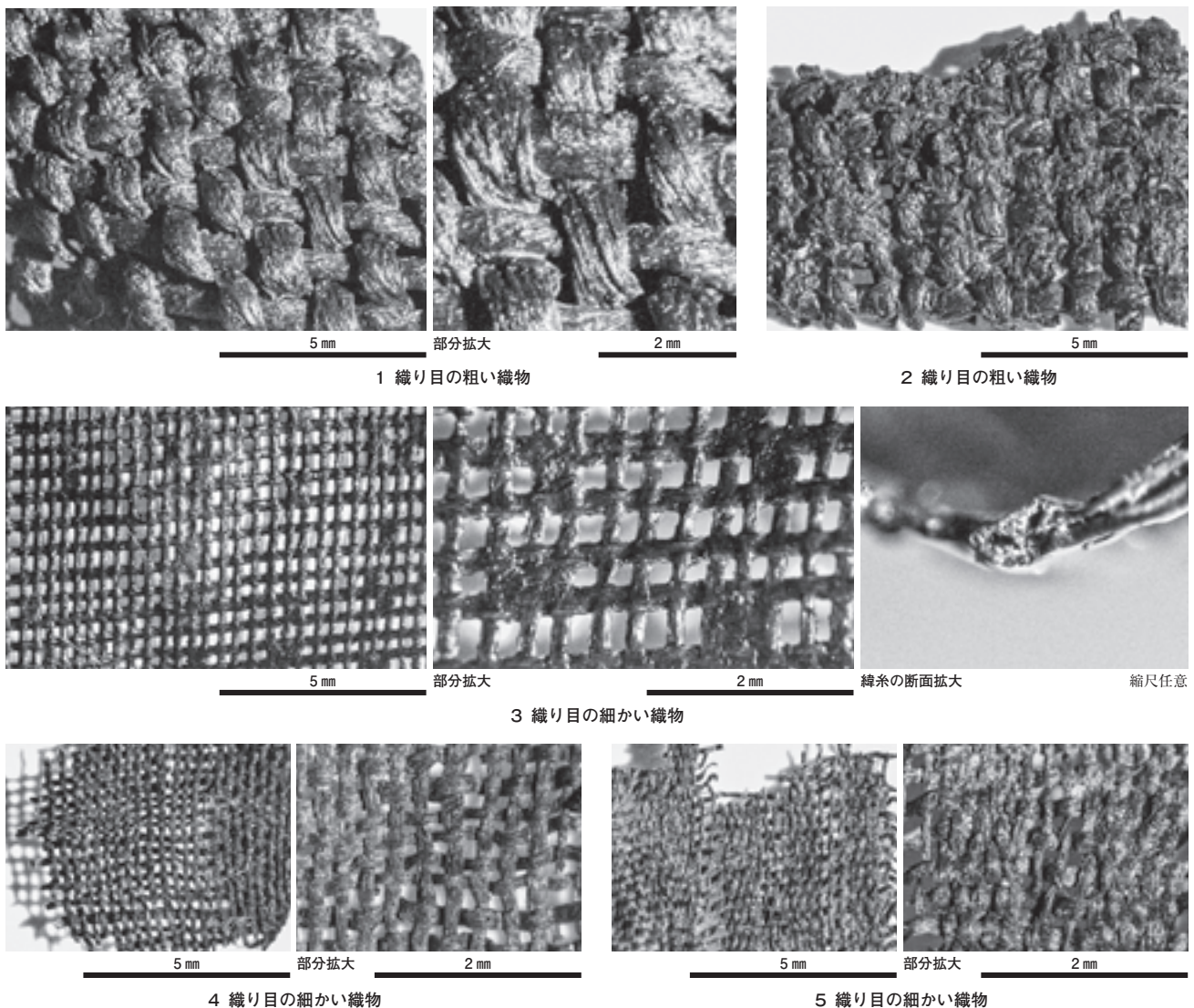


図139 第197-6次出土繊維製品

5 cm四方程度である。なお、機を用いて作られたものを織物とし、そうではないものを編物とする理解が一般的であり³⁾、織り目が均質であるので織物と判断した。ここでは、便宜上、織物として記載する。また、経糸と緯糸の区別は以下の特徴をもとに判断した。すなわち、経糸のほうが緯糸よりも細くて密度が高い、経糸のほうが浮き沈みの落差が大きい、撚りがある場合には経糸のほうが撚りが強い、といった点である。

さて、本調査で出土した織物の断片は、実体顕微鏡下で視認できた織り組織と織り密度に応じて、4種類に分けられる(図139)。ひとつはS撚りをもつ太い糸で、織りが粗い一群(1・2)。織り密度をみると、経糸で10本/cm、緯糸では9本/cmとなる。重なった状態であるが、廃棄時にたまたま折り重なった状態になったものと思われる。2の織り密度は、経糸で11本/cm、緯糸で10本/cm。1・2の糸はともに撚りをもつので、植物繊維の可能性が高い。いずれも平織物。

次の一群は、細い糸で細密に織ったもので、漆と思われる黑色物を塗布する(3)。経糸と緯糸ともに2本一

組を単位として織る。ただし、2本一組ではあるものの、一組となる2本がそれぞれ交互に経糸をくぐっているように観察できる。経糸の織り密度は24単位/cm、緯糸のそれは16~17単位/cmである。なお、糸の内部が空洞になっているので、漆膜としてだけ存在する繊維痕跡である。

3つめは、きわめて細い糸で細密に織られた平織物(4)。織り密度は、経糸が34本/cm、緯糸で30本/cm。糸は引きそろえた状態に見え、撚りははっきり観察できない。動物繊維の可能性はある。ただし、糸の破面が、さほどほつれたようには見えない。

残るひとつは、もっとも細密な平織物(5)。糸に撚りは観察できず、動物繊維の可能性が高い。経糸に粗密が認められる箇所があり、一見、縦縞模様のように見える。しかし、粗密がなく均質な箇所もあるので、偶然、皺が寄った箇所に糸が寄ってしまった結果と思われる。

今後、赤外分光分析を実施することで素材の同定を試みるとともに、走査型電子顕微鏡での詳細な観察を踏まえて製作手法の検討をより一層深めていく必要がある。

